

## 「なんとなく」が熟慮の入り口～Feel 度 Walk と知図という試みを通じて～

荒木 寿友(本学教職研究科教授 教育方法学 国際教育)

今、いろんなところで VUCA 時代の到来が言われています。先行きが不透明でどのような未来が待ち受けているか分からない、そんな時代がやってくることを見越して、世界各国の教育は、子どもたちがより主体的になり、自らで道を切り開き、よりよい人生と幸福な社会を実現していくことを目指しています。

そういった「責任ある主体性」を育成する一つの教育的試みが、PBL といった探究型の学びでしょう。実社会における複雑な課題を解決していくプロセスを通じて、批判的な思考や創造的な思考、協働することで価値を生み出していく共創の力などを育てていくことができます。総合的な学習(探究)の時間は、今後ますます重要視されていくのではないのでしょうか。

ところがです。学校教育のシステムそのものを見てみるとどうでしょうか。PDCA サイクルは依然として強く言われており(カリキュラム・マネジメントなんかはその最たる例でしょう)、計画を立て、どういう教育的働きかけをすればどういった結果が出るかということを実施前から想定することが大前提となっています。ただ、このような「工場生産ライン的思考」に基づいた教育デザインでは、今後太刀打ちできないというのが未来予測であったはずで、今こそ私たちの「教育観」の脱構築が求められていると言えるでしょう。

その脱構築を目指していく試みとしてここで紹介したいのが、一般社団法人みつかる+わかる代表理事の市川カさんが提唱する Feel 度 Walk (フィールドウォーク) と知図(ちず)です。市川さんが大切にしていることは「ちょっとしたことに気を向けて、見えない成り行きを追いかけること」、つまり「なんとなく」やってみるということです。Feel 度 Walk では、何かについて発見しようという目的を持って歩くのではなく、なんとなく気になることを求めて、あてもなく歩いて、「Feel 度=感度」を上げながら、気になるものを写真に撮って、それをじっくりと見ながらスケッチをして(知図)、そんなことをしているうちに様々な情報の繋がりが見出

されて「仮説」が出てきて、何かを「みんなとたくらんでみたくなる」と言います。すべての出発点は「なんとなく」なんです。

最初から「仮説」があって、その「答え」もある程度想像がつくものであるならば、それは問題集の応用問題を問いているような感じで、探究のよさであるモヤモヤワクワク感が感じられません。探究とは本来、どのような結果になるのかわからない、先の見えているものではないはずで、だからこそ、ワクワクしながらモヤモヤするんですよね。「なんとなく」という不確かな状況を楽しみながら、そこから生まれてくる疑問や仮説をじっくりと考える、つまり、「なんとなく」始めることが、「熟慮」というワクワクモヤモヤの深い思考に繋がっていくのです。

かつてデューイは、熟慮の出発点を困惑、混乱、疑惑といった「不確定な状況」にあると言いました。そしてその「不確定な状況」が「統一された状況」になることこそが探究のプロセスなのです。「なんとなく」歩き始めるということは、不確定な状況の「扉」を開けることであり、新しい世界に入っていき、ことといえます。

学校教育はシステムとしての枠が決められており、時間にも制限があります。その枠組みのなかで最大限の成果を求めていくのも、ある意味仕方のないことかもしれません。しかし、子どもたちが不確かな未来社会をよりよく生き抜いていくためには、おあつらえされた問題を効率よく解く力だけではなく(それも一定必要だと思いますが)、「なんとなく」の中から課題を見出して解決していく力です。そのためには「なんとなく」始まることを大人が信じて待つことが求められます。忙しい時代だからこそ、逆に信じて待つ必要があるのです。それこそが、「教育観」の脱構築に繋がっていくのではないのでしょうか。

みなさんも「なんとなく」歩いてみませんか。

参考文献:市川カ、井庭崇『ジェネレーター:学びと活動の生成』学事出版、2022年。